

【論 文】

分からない他者をめぐる名前の詩学

——住野よる『君の臍臓をたべたい』論——

西貝 怜

甘ったるくて理想ばかり語るその絵本は／
 鋭くとがったナイフの様な現実を語ってもいた／
 この本にしよう作家の名前を見る／
 それは私が知っている名前／私とその人だけが知っている名前
 小原慎司『二十面相の娘——少女探偵団』¹

1. はじめに

『君の臍臓をたべたい』は住野よるの商業デビュー作である。初出は小説投稿サイト『小説家になろう』に投稿されたウェブ小説であり、単行本としては双葉社から2015年に刊行された²。作品の概要は、以下のとおりである。

構成は、山内桜良の死を伝えるプロローグと全10章から成る。1から7までが過去、8から10までとプロローグが現在について語られている。語り手は終始、志賀春樹である。過去では桜良と春樹の親密になっていく関係性の変化が、現在では桜良の記した『共病文庫』内の「遺書」を読んだ春樹の意識変化が主に書かれている。春樹は、桜良との交流を思い出しながら過去を記述するが、そこで悲嘆したり愛を語ったりはしない。また、「遺書」を読んで泣きはするものの、語られるのは桜良ともっと一緒にいたかったというようなことで、まるで恋愛の要素が意図的に避けられている。桜良の死を哀しんだ春樹は、恭子と友人になり、ともに桜良の墓参りをしてる場面で

本学法学部非常勤講師（現代教養学部科目担当）

作品は閉じられる。

この『君の膵臓をたべたい』の売り上げは凄まじく、2016年の累計発行部数は約76万部にもなり、同年の売上高も書籍全体では4位、小説という区分では1位である³。2017年には文庫化⁴しマンガ作品上下巻⁵も発売されている。実写映画化⁶もされており、その売り上げも上映日である2017年7月28日から同年9月10日の45日間で興行収入30億円を突破するように好調であった⁷。さらに翌年の2018年にはアニメ映画化もされている⁸。これらメディアミックスの影響もあってか、2022年まで『君の膵臓をたべたい』は売れ続けている。2022年12月22日に書店で店頭発売されていた文庫版を購入し確認したところ、2022年2月14日に第52刷が発行され、帯には「累計部数300万部突破！」と書かれていた⁹。

『デイリースポーツ』では、映画化された『世界の中心で、愛を叫ぶ』¹⁰との関係で『君の膵臓をたべたい』の映画化作品が「青春」「号泣」「難病と死」など共通のキーワードも多¹¹いことから、「今のティーンにとってのセカチューになれば」と大ヒットの再現を狙¹²って制作されたと書かれている¹¹。また、以上の『君の膵臓をたべたい』のメディアミックスの展開と興行的な成功は一つのブームともいえ、「“キミスイ”現象」などとも呼ばれている¹²。

ところで高橋与四男は、伊藤左千夫『野菊の墓』¹³から片山恭一『世界の中心で、愛を叫ぶ』¹⁴などの近現代の様々な日本の物語作品を、映像や小説あるいはメディアミックスの垣根を越えて取り上げ、「純愛」とは「限られた時間内に展開される若い男女の真剣で熱烈な愛」と述べ、さらにこれこそが「結局」のところ時代を超えて大衆に受容される「純愛」の様式だと主張している¹⁵。『世界の中心で、愛を叫ぶ』などとも比較されながら、『君の膵臓をたべたい』はメディアミックスの総体『キミスイ』と眼差ざされ、「純愛」を描くいわゆる純愛ものとして大衆に受け入れられて来たといえよう。

大橋崇行¹⁶も原作小説『君の膵臓をたべたい』を、片山恭一『世界の中心で、愛を叫ぶ』や堀辰雄『風立ちぬ』¹⁷のような「重い病を抱えたヒロイ

ンとそれを見守る男性主人公という構図は、「何年かに一度流行する物語」の系譜と位置付け、その意味で「定番」の小説」と述べている。しかし大橋は、「病をめぐって悲愴（ひそう）感にあふれた男女を描いてはいない」ことや「友だち以上・恋人未満」の人間関係を描く青春小説としての様相にも注目し、「定番」を突き崩そうとする発想」によって「新しい物語を紡ぎ出」そうとした「作者の挑戦」を評価している。

メディアミックスの総体として捉えられ、純愛ものとして評価される以上の何かが、小説『君の臍臓をたべたい』には描かれているということに通ずるこの大橋の言説を、本稿でも評価したい。たしかに実写映画版では恭子と春樹が結婚するように、小説と比べて恋愛的要素が強く描かれている。ただ、実写映画版とアニメ映画版では【仲良し】【?????】などと小説で描かれた、文字でのみ表記できる特異な名前を表現できていない。そして詳細は次節以降で論じるが、この特異な名前表記こそが、恋愛を避けるような人間関係を表している¹⁸。

小説の『君の臍臓をたべたい』には作品論の先行研究もある。土田知則『他者の在処——住野よるの小説世界』に収められた「第1章 『君の臍臓をたべたい』——僕とは正反対の彼女」である¹⁹。この土田の研究も、先の大橋の言説と同様に、春樹と桜良の死別といった「悲劇に還元できない大切なもの」として「人と人がどう付き合うか」という人間関係に焦点が当てられている。より具体的に述べると、春樹と桜良の相互の「他者性」と、作中でも「正反対」と書かれる二人の態度の差異について注目し、その「関係性」の変化が考えられている。

桜良の名前は作中に早々に登場するにも関わらず、春樹の名前は終盤に明らかになる。土田はこの名前表記の非対称性から二人の「関係性」の考察を深める際に、春樹の本名が明らかになるまで、その名が【仲良し】【?????】などと表記されていることを紹介している。この特異な名前表記については、作中の桜良との関係で変化していく。名前の表記が、春樹と桜良の関係性を表しているのである。ただ、土田の研究は「他者性」に注

目したものであるために、特異な名前表記についての言及は、春樹の本名が明かされるまで春樹がその特異な名で「呼ばれ続けている」という指摘に留まっている。

『君の臍臓をたべたい』について、春樹と桜良の関係からさらに理解を深めるには、この特異な名前表記の機能とその意味を明らかにすることが肝要であろう。そうすることで、『君の臍臓をたべたい』の過去の部分的理解でなく、全体の様相の理解も深まる。というのもこれも詳細は後述するが、その特異な名前表記で表記される関係で春樹は桜良と関わったゆえに、春樹は「遺書」を読みメールを確認することで初めて泣き、大きく変化していく。意識と行動のその変化によって、春樹はもともと陰悪だった恭子と友達になり、2人で桜良の墓参りに行くという結末を『君の臍臓をたべたい』は迎える。さらにこの結末ではじめて、春樹が他者と名を呼び合う関係が描かれている。過去における桜良との関係性の変化と、現在における春樹の変化は、名前という問題系で密接に関わり合っているのである。

以上から、本稿でも大橋と土田が目したように、桜良と春樹の関係から『君の臍臓をたべたい』を考えていく。特異な名前表記の機能と意味を明らかにすることからはじめ、この射程で最終的には春樹の変化がどういったものだったのかを明らかにすることで、『君の臍臓をたべたい』の理解を深めるのが本稿の目的である。

2. 特異な名前表記について

『君の臍臓をたべたい』は、桜良がすでに死んでいることを「山内桜良の葬儀」という言葉で示すことから始まる。この冒頭の場面では「『君の臍臓を食べたい』」という言葉が春樹が桜良に送ったのだが、「彼女がそれを見たか知らない」とも述べられる。そして主に桜良との関係について、春樹は回想していく。その回想は、桜良が春樹に図書室で「君の臍臓を食べたい」と「告白」することからはじまる。春樹が、桜良が殺されたことをニュースで知った後に、『共病文庫』を読まなければならないと考えて回想は終わる。

そして春樹は『共病文庫』を読んだ後に、桜良に「君の臍臓を食べたい」とメールで送った文面が「開かれていた」ことを知る。

春樹が問いを投げかけそれに作中の後半で春樹自身が気付くという点から、『君の臍臓を食べたい』という作品は、読者が読み進めると同時に作中の時間も流れていく構成だといえる。また、過去がそのまま過去として描写されているのではない。たとえば相手に質問をして答えてもらうというような『『真実と挑戦』ゲーム』を二人が行っているときの描写に、「ちなみに、以下が彼女に「これ面接？」と言わしめた五回の質問と答えである」と書かれている。これは、過去についての判断である。すなわち、春樹は過去を思い出しながら、今の地点でその過去を記述している。そして、この過去の記述の場面でのみ、特異な名前表記は用いられている。

特異な名前表記のルールは、以下のように示されている。

それよりも、彼が僕を【目立たないクラスメイト】とは違うものとして呼んだように聞こえたのが気にかかった。例えば、【許せない相手】とか。ひとまず理由は分からないけど、そういうことにしておく。

自身の名を呼ばれたときに、その呼んだ人が自身をどう思っていたと、春樹自身が想像していたか。これを思い出しながら、今の時点で記述しているのが、特異な名前表記である。さらに述べると、特に呼びかける人との関係性に着目した名として表記されることが多いのは、以上のタカヒロの例や、以下で検討する桜良の呼びかける名の変化からも明らかである。

春樹は入院している桜良にも「正しくても正しくなくても」「名前を呼ばれた時に、僕はその人が僕をどう思っているか想像するのが趣味」と伝えるが、これを聞いた桜良は「自己完結王子」だと春樹を評する。ここを考えることは、さらに春樹の態度と特異な名前表記との関係の理解を深める。

たとえば二人の関係を恭子に尋ねられて、桜良が「仲よし」と述べた後に春樹も「仲よし、かな」と答える。以降、桜良から呼ばれる春樹の名の表記

は「【仲良し】くん」になり、「僕らは仲良くしてる」とも考える。それ以前の「【仲のいいクラスメイト】くん」から、桜良の言葉によって「クラスメイト」が外れた。放課後にともに食事をする仲を訝しんで恭子から二人の関係を尋ねられたように、同じ教室にいる同級生である「クラスメイト」以上の関係であることを桜良によって気付かされ、春樹はその気付きに沿って振る舞うから「【仲良し】くん」と表記を変えたのである。

「自己完結王子」とは言い得て妙である。春樹は、他者の中の自分を自身の想像で規定している。以上のように、その規定の是正も他者の言葉によって行われてはいる。ただ、是正されようが、春樹は呼ばれた名の想像から、他者との関係を自身の知る範囲に落とし込んで、他者と交流しているのである。これは「【?????】くん」も同様である。

桜良から呼ばれる際の名前表記は「【秘密を知ってるクラスメイト】くん」「【仲良し】くん」などと変わっていく。徐々に二人の仲は親密になっていく。そして最終的に行き着くのは「【?????】くん」である。桜良が入院中の場面で、春樹は桜良に自身を「仲良し」と想っているのではないかと尋ねたときに、「ははずれ」と言われる。そして正解を聞くが、「人間関係」の「面白」みは「相手が自分にとって何者か分からない」ところにあると答えられる。春樹は、これまでのように桜良への振る舞いを、【秘密を知ってるクラスメイト】【仲良し】などのように自分の知る範囲に規定することを妨げられる。ただ、これまでと同様に桜良の言葉を引き受けたからこそ、この場面以降に桜良から呼びかけられる名は、桜良が死ぬまで「【?????】くん」で表されるようになった。

なお、この場面より前に一度だけ「【?????】くん」という表記が認められる。これは桜良の家で、春樹が桜良から「恋人でも、好きな人でもない男の子と、いけないことをする」と言われ「ハグ」されたときに、呼びかけられたことを思い出して記述された名である。ここでも、春樹は自身の分かる範囲に名の意味を落とし込んで記述することが、桜良に妨げられている。ただ、以降に再び【仲良し】に戻るように、細かく確認していくと桜が

入院中に【?????】で示される関係と異なる点もある。そのために以降で検討する【?????】は、すべて桜良が入院した後に記述されたものを対象とする。

かつて春樹は、桜良に「重病に罹ってるクラスメイトなんて興味がつきない」と述べた時、「私っていう人間」には興味がないのかと尋ねられてしまう。だが【?????】で示される関係では、春樹は桜良のような「人を愛せる人間」に近づき、桜良との病室での「日常」を「好きになり」「喜んで」もいる。だから桜良に「生きてほしい」とも願う。それは春樹がついに桜良を【仲良し】のように一義的な存在でなく、様々な顔を持つ一人の「人間」にしようとしているようにも見える。この名前表記の期間に、二人の距離が大幅に近づいた。

それでも【?????】として記述していることからこの態度は、桜良のいう「分らない」さも含めた多義的な「人間」としてではなく、「分らない」という役割があると自身を規定して、桜良に振る舞っていたと考えられる。関係性を自身が理解するまでの仮の記述ともいえるかもしれない。結局、春樹は自身の定めたルール上でしか、過去では人と関われなかった。だからここで記述される名は志賀春樹でなく、いまだ「【?????】くん」なのである。呼ばれる名を呼ばれるままに受け取りそこに多様性を見ることは、まだ春樹にはできない。そしてこの達成が、最後の墓参りの場面で描かれている。

以上の名前表記の整理から、春樹は過去および回想する段階では、他者を自身の理解できる一義的ともいえる関係に落とし込もうとしていることが分かった。その関係は他者の言葉によっても変化する。これは、「【?????】くん」という表記でも同様である²⁰。

3. 桜良が春樹と関わり続けた理由

名前表記の整理によって、春樹の桜良への態度も分かった。先に述べると、まさに特異な名前表記をするような春樹だったからこそ、桜良は春樹と

関わり続けた。これをこの節で確認していく。

春樹は自分から桜良に関わろうとしたことはない。春樹と桜良が、過去の記述に見られるような物語を紡いだのは、終始桜良が春樹に行動をともにすることを要請したからである。では桜良はなぜ春樹と交流したかったのか。その理由は、桜良の以下の言葉に集約されている。

【仲良し】 くにしか話さないよ。君は、きっとただ一人、私に真実と日常を与えてくれる人なんじゃないかな。お医者さんは、真実だけしか与えてくれない。家族は、私の発言一つ一つに過剰反応して、日常を取り繕うのに必死になってる。友達もきっと、知ったらそうなると思う。君だけは真実を知りながら、私と日常をやってくれるから、私は君と遊ぶのが楽しいよ」

さらに「親友」の恭子について桜良は、「感傷的だからさ、言ったらきっと私と会う度に泣いちゃうもん。そんな時間楽しくない」とも述べる。これまでの友人関係の中に病気が入り込み、自身が病人としてラベリングされ、それまでの「日常」が壊されることを桜良は嫌がったのだ。桜良が望む「日常」とは、病や死が眼差されない日々と言えよう。

反面、春樹が桜良の病気を知ることから二人の関係は始まる。ただ、「真実を知りながら、私と日常をやってくれる」というのは、最初から病気を知っている人と関係を紡げば、それは病気ありきの「日常」である、ということとは異なる。

春樹は『共病文庫』を拾って読んでしまったときに、桜良から念を押しされるように自身が遠からず死ぬことを聞かされる。そこで「僕」は「……………ああ、そう」と素っ気なく答え、桜良は「え！ それだけ？ なんかこう、ないの？」と言われる。そして桜良は「君は凄いのよ。もうすぐ死ぬって言うクラスメイトと普通に話せるんだもん」と述べるように、春樹が他者の目の前の死にすら、ある種の形式的にしか関われないことに

気付く²¹。これこそが「真実を知りながら、私と日常をやってくれる」ということであり、桜良が春樹に求めていることである。

終末期患者でありながら、それを隠さず健常者のような「日常」を生きたい。そのためには過度に死を、病を眼差されてはならない。この桜良の希望を叶えてくれるのが、特異な名前表記をするような春樹なのだ。だから桜良は春樹と同じ図書委員になり、二人は交流し続けたのだ。

4. 「君の臍臓を食べたい」と名付けることのできない関係

これまで、名前表記の問題から春樹と桜良の態度や関係性について考察してきた。この両者の関係について重要なのが、やはり「君の臍臓を食べたい」という言葉であろう。殺人がなければ、「君の臍臓を食べたい」と相互に言い合っていたことが、二人で了解されていただろう。この、桜良が生きている間に「君の臍臓を食べたい」で通じ合うことが叶わなかった意味も、実は特異な名前表記から考えることが出来る。

「君の臍臓を食べたい」という言葉には、大きくは身体的なものとの精神的なものとの二つの意味がある。前者は以下の桜良の言葉で示されるように、身体の交換性に関するものである。

「臍臓が悪かったら肝臓を食べて、胃が悪かったら胃を食べてって、そうしたら病気が治るって信じられてたらしいよ。だから私は、君の臍臓を食べたい」。春樹は「僕の小さな内蔵に、君を救うなんて重荷を背負わせられないな」と答える。ここで示されているのは、〈病の交換〉とでもいうべき意味としての「君の臍臓を食べたい」である。春樹は桜良の臍臓に関して「もしかしたら、悪いところがなくなったら死なないんじゃない？今すぐにでも食べてあげようか？」とも直接伝えている。【?????】で表される親密な関係の時に、である。ただ、その場面で通じ合わなかったのは〈病の交換〉としての意味しか、相手の臍臓を食べることにはないからである。

また、二人は焼き肉屋で食事を共にして、他人の内蔵を食べることについて以下のような会話もする。

「臍臓は君が食べてもいいよ」

「聞いてる？」

「人に食べてもらおうと魂がその中で生き続けるって信仰も外国にあるらしいよ」

—中略—

「食べたくないの？」

「君は臍臓のせいで死んでいくんじゃないか。きっと君の魂の欠片が一番残ってる。君の魂はとても騒がしそうだ」

〈他者の魂を内に取り込む〉という意味での「君の臍臓を食べたい」といえよう。まさにこの意味で二人は、「君の臍臓を食べたい」で通じ合っていた。〈他者の魂を内に取り込む〉ことで相手のようになりたい、かつその行為を「ありふれた言葉」で表さないために「君の爪の垢を煎じて飲みたい」でなく「君の臍臓を食べたい」という言葉で相手に伝える。このような構成の文章を桜良は「遺書」に書き、同様に考えて春樹は桜良に「君の臍臓を食べたい」という文面をメールで送った。

ここで、前節までの議論をまとめる。春樹は呼ばれた名に込められた思いを想像し、これを特異な名前として表記していた。これから分かることは、その過去に春樹は一義的ともいえる役割で他者と関わろうとしていたということである。桜良も春樹のそのような態度を評価して関わっていた。しかし、【?????】で表される関係は、桜良がもともと望んでいたものではない。それは、まるで恋人のように春樹が桜良と関わろうとすることでもある。

春樹は、桜良と恋人になる用意があったといえよう。というのも、桜良が春樹を呼びかけるときに恋心を春樹が感じたなら、桜良にあなたは恋人だと言われたなら、恋人がどのようなものか分かっていなかったり一義的に規定できなかつたりしても、これまでの春樹の名前表記のルールから「【恋人】

くん」と表記するだろう。そして、桜良が春樹からついに「君の臍臓を食べたい」と言われた後にも生きていたら、桜良の態度はこれまでと同じだったといえるだろうか。

【?????】で示される関係において、春樹は桜良の死期が早まったという異変を強く感じて、「生きてほしい」という願いを伝える。このやりとりについて桜良は「自分だけの魅力を持つ」「友達とか恋人とか、そういう関わりを必要としない君が」「私を選んでくれた」から、「誰かと比べられて」ではなく桜良「自身として必要とされ」「自分が、たった一人の私であるって思えた」と「遺書」にその喜びを記す。ただ、桜良はそのように心配する「僕」に「寿命が半分」になったことを「嘘」で隠す。これは、病気を眼差ざされることで自己のアイデンティティを強く認識できることも心地よいが、やはり桜良は病状が重くなっても、病気を特別に眼差ざされることのない「日常」を営みたいということである。

それでも、桜良が元々「僕」に惹かれていたことは度々示される。そして「遺書」では、「君に恋をしてる」けど二人の関係を「恋人」のように「ありふれた名前」にはしたくなかったと告白されている。ただ、恋人にならないのは、「多分ね（笑）」と書かれている。これが書かれたのは、「君の臍臓を食べたい」と春樹に言われる前である。また、春樹の母親も【?????】で示される二人の關係に勘づき、春樹に「彼女できたでしょ？」と尋ねる。さらに、実は春樹も、「初恋の人みたいな女の子」と桜良を墓参りの場面で振り返っている。二人の關係はすでに恋愛に近似的であり、また、恋愛に向かっていようにも見える。ここで、さらにあなたのようにになりたい、と相互に同じ言葉で伝え合っていたら、それは愛の契りになっていたとしても不思議ではない。

『君の臍臓をたべたい』は徐々に親密になる二人を描いている。二人が恋人などの既存の言葉で置き換えられる關係を避け続けられたのは、春樹の「君の臍臓を食べたい」という言葉が桜良に届いたが、桜良から春樹にその応答がついになされなかったからだと考えられる。すなわち、病で予定調和

的に桜良が死んでいたら、この小説は映画版のように従来の純愛ものにより接近し、病で死んだ最愛の恋人を想起するような作品になっていたかもしれない。殺人によって桜良が突然死に、「君の臍臓を食べたい」で通じ合えなかったことにより、二人の関係は名付けることの難しい【?????】のまま閉じられる。

5. 名を呼び、名を呼ばれる関係へ

ここまでで、特異な名前の表記の機能と意味を明らかにして、桜良と春樹の過去の関係を考察してきたことにより、二人の関係がどのようなものかはある程度の理解が出来た。そこで、いよいよ春樹が「遺書」を読み、「君の臍臓を食べたい」というメールが桜良の生前に届いていたことを認識し、変化していくことを考えていく。

「遺書」には前節で見たように桜良が、恋心のようなものを隠さず、強く春樹が必要だと書かれていた。これを読み、さらに春樹はメールが桜良に見られていたことを確認して、泣きながら「嬉しかったんだ。届いていたこと。通じていたこと。彼女が、僕を必要としてくれていたこと」と考える。そして、この一年後の桜良の墓参りのときに、春樹は「君みたいに」「人を認め」「愛せる人間」になりたいと、心の中で述べる。その第一歩として、恭子と友達になったのが、具体的に描かれる春樹の変化ではある。これは呼ばれた名をそのまま受け取り、相手を名で呼べるようになったということである。もともと春樹は、恭子を「親友さん」と呼んだり、桜良へ『共病文庫』に自身の名を出すなど注意したり、徹頭徹尾、他者と名で呼び合う関係を忌避していた。ここでも重要なのが、名前の表記である。

この名を呼び合う際の人名について考えるには、哲学分野の知見が役立つ。村岡普一は『名前の哲学』の中で、人名とは「個人を特定したり、ほかのものと区別したりするのでなく」「個人が個人のままであらゆるほかのものに」「応答しあうような関係」を「創出するような言語装置」と述べている²²。さらに村岡は、人名の意味するところの「内包」は、「他者とともに

あ」することで「〈いま〉と〈ここ〉において増してい」き、これに連動して「個性」「かけがえのなさ」も増していくとも述べている²³。

春樹が桜良から呼びかけられた名を【仲良し】などと表記するような、一義的に桜良を捉え、桜良を最後まで「君」と呼び続けたのは、人名に付与される多様性を拒否するような態度である。【?????】もすでに確認してきたとおり、他の特異な名前前で表される関係と比べると特殊な部分が認められつつも、結局同様であった。恭子から呼ばれる名を春樹とそのまま受け取り、春樹も恭子を名で呼ぶ関係は、これの逆である。名を呼び合うごとにお互いの関係の意味や価値が、各々のかけがえのなさや個性が増していくのである。

春樹は「友達というものの基準が分からなかった」とも述べている。ただ、分からなくても【?????】のようには、【友達】のようには、春樹は恭子との関係を捉えていない。友達として恭子、春樹と呼び合う関係は、友達をなにか一つの意味や役割に収束しようとする関係でなく、上記のように友達に様々な意味が付与されていく関係だからである。

そして、『君の臍臓をたべたい』の最後で、作中でたった一度だけ春樹が「そうだね、桜良が待ってる」と桜良の名を口にする。そして「もう怖いとは思わなかった」で、この作品は閉じられる。この「怖」さとは、春樹が桜良を名前前で呼んだ時に、そこに桜良が「意味」を見いだすことである。だから春樹は桜良を「君」と呼び続けた。自身が「正しくても正しくなくても」「名前を呼ばれた時に、僕はその人が僕をどう思っているか想像する」ことを、同様に桜良にされるのを春樹は「怖がった」のである。しかし、春樹はその「怖」さを乗り越えたからこそ、桜良と名で呼びかけられたのである²⁴。

何故、「怖」さを乗り越えられたのか。それは、恭子に桜良の病を伝えなかったことを「許さない」と言われ、一度は拒絶された関係を乗り越え、二人で以上のような関係を築けたからにはかならない。

桜良の生前の恭子は、春樹に「中途半端な気持ちで」「近づく」ことで

「桜良を傷つけたら、私が、殺す」と述べるように、常に春樹に「敵意むき出し」であった。他者と名を呼び合う関係を忌避して一義的に他者と関わるような、特異な名前表記で表される態度の春樹を、恭子は認められないし受け入れられない。春樹は恭子を「親友さん」と呼んでいたが、「遺書」を読んだ後から、すぐに春樹は「恭子さん」と呼びかけることが出来るようになった。そして、「一歩ずつ」「辛抱強く」関係を変化させていき、二人は最終的に友達になれた。恭子に友達になることを拒絶されてから二人で墓参りに行くまで、具体的な描写は空白ではあるが、この期間も二人は名を呼び続けたのだろう。春樹が特異な名前表記で表されるような態度を省みなければ、恭子は春樹を受け入れられないのだから。春樹自身が「難しかった」と振り返る人間関係は、他者と名で呼び合えるからこそ構築できたものである。以上から、春樹が桜良と呼びかけたときに、その名に意味が付与されることを「もう怖いとは思」わない、と考えられる。

さらに、死者である桜良の名さえ呼べるようになったことから、春樹は恭子と桜良だけでなく、分からないままに他者と名を呼び合う関係を生きることが出来るようになった、とも言えるだろう。これについては、「ガム」をくれるクラスメイトとも友達になったことに加え、次節で検討する続編でも示唆されている。その続編では、映画とは異なり春樹が恭子とは別の女性と結婚している²⁵。

6. おわりに

後日談の住野よる『父と追憶の誰かに』²⁶では、春樹は結婚し父親になっている。春樹は、娘のふゆみとの会話で桜良との関係を「友達じゃなかった。恋人でも家族でもない。仲良しだなんて彼女は言っていたけど、それどこか違う」「誰にも分からない」ものだと説明している。本稿の議論を経てこの場面を考えることで、春樹はこの「分からない」を【?????】で表すような、一つの正解を求めるような一義的なものとして捉えているのではない、と理解出来よう。例え友達などと固有名称がある関係でも、「分か

らない」ような関係でも、その関係性の中で名を呼び合うことで相互に名の意味が増えていく人生を、『君の臍臓をたべたい』で春樹は歩み始めていたのだから。

続編をも射程に入れる、『君の臍臓をたべたい』の最後で描かれた〈本当の名で呼び合う〉関係は、とても豊穡で善いものにも見える。しかし、桜良が愛した春樹は消失してしまった、と捉えることもできよう。恋心を秘匿し、求められることに舞い上がりながらも、桜良は春樹との「日常」を選択した。繰り返し述べてきたが、「名前を呼ばれた時に、僕はその人が僕をどう思っているか想像」した関係で振舞う春樹だからこそ、桜良は交流を続けたのである。にもかかわらず、本稿で明らかにしてきたように、春樹はそのような「自己完結」でもう他者と関わらないだろう。

また、この作品は、春樹と恭子の関係を死者である桜良が「うわははっ」と祝福するような描写も見受けられる。たしかに、桜良は恭子と春樹が友達になることを望んでいた。しかし、これは死者の不当な改変とも読めるかもしれない。

本稿は、名前表記にこだわって『君の臍臓をたべたい』を考えたものである。そのために、この春樹の変化の善し悪しはまだ判断出来ておらず、春樹の変化を成長と墮落のどちらだとかはいえない。これらを判断すること、すなわち〈本当の名で呼び合う〉関係の倫理性を考究することは今後の課題としたい²⁷。

ここまでで〈本当の名で呼び合う〉関係について論じたからこそ、改めて特異な名前表記についても考えることが出来よう。ここで、『固有名の詩学』に収められた山崎泰孝の論考「第四章 リルケ作品における名づけと呼びかけ」を見てみる²⁸。

「正しい名前」を求めても、その名が「対象と完全に合致することはない」。「正しい名前」を求めることは「実現」することがないので、「予め挫折を定められ」ている。しかし、このような名をめぐる「齟齬」にこそ、「意味がある」。正しくなくとも「名づける試みの中で」「新しい表現」が「生まれ」

る「可能性」がある。そして、名を「呼びかけ」る行為には、「正しい名前」を求める「欲望を見いだすことができるのではないだろうか」。

以上が山崎による、「正しい名前」を求める行為についての考察の要約である。この山崎の議論を『君の臍臓をたべたい』に引き付けて抽象化してみる。すると、名づけの試行錯誤は「挫折」することが決定的であり、当然ながらその試みで生まれた名にも実態との「齟齬」も含まれるが、この名や名づける試みにこそ文学的な価値がある、といえよう。これを参照すると、特異な名前表記は以下のように考えられる。

たとえば【仲良し】な人とはどのような存在で、【仲良し】な関係とは如何なるものか。【仲のいいクラスメイト】のほうがまだ分かりやすいだろう。それは、学校生活を共に送るクラスメイトという社会的な役割が含まれているからである。たとえば職業上の付き合いなどの社会的な関係に比べて、【仲良し】に関わらず友達、親友、恋人などの私的な関係の多くは多義的で難しく分からない。にもかかわらず、呼ばれた名を【仲良し】と記述するということは、その関係とともに、他者の考える自分すらも春樹自身の知る範囲で一義的に規定するようなものである。

相互に名を呼び合うことも、他者にその名に意味を見いだされることも、拒否し続けること。これは、他者の多義性や分からなさを排除する振る舞いであり、人間関係として最初から破綻している。そのために、呼びかけられるごとに生成されていた特異な名前表記も、その時々で他者の考える春樹像と合致しようとしてしまいと、その破綻が内包されているのである。それでも破綻した態度のまま、人の持つ多義性を認めたり他者の「分からない」さを受け入れたりしようとする挑戦が、【?????】では描かれている。結局〈本当の名を呼び合う〉ことでしか達成できない人間関係だが、これに【?????】は近接できている。

山崎が「正しい名前」でなくとも、「挫折」や「齟齬」があろうとも、名付ける行為と正しくない「名前」にこそ価値があるといったように、特異な名前表記は誤っているから価値がないとは棄却できない。桜良との関係を春

樹は振り返って、「友達」もいなかった過去の「人生」において初めて「生きた」と考えている。この「生きた」という言葉は、一義的に他者と関わって出てこないだろう。たとえば「たくさん冗談を言って、たくさん笑い合い、たくさん罵倒し合って、たくさん尊重し合い、そのような「日常が、僕は好きになって」、【?????】と表記するような「第三者的な僕」は疑問に思う。まさに特異な名前表記でも【?????】まで記述できたからこそ、自身の過去を肯定できたことが「生きた」という言葉で表されてはいないだろうか。誤っていても、春樹の青春はここにある。

ところで、『彼女の「正しい」名前とは何か』の中の「終章 「他者」の存在を思い出すこと」で岡真理は以下のように論じている²⁹。「私」という「主体が言説的に構成される時、その言説のなかで同時に他者も構成される」。「私が、私とはこういう者だと勝手に想像するような私」であるとき、「私が他者をもまた、手前勝手に想像するような存在として一方的に規定している」。これはまさに特異な名前表記で表される過去での春樹の態度と同じである。岡はさらに「そのような一方的な関係性の規定」に倫理的問題を見る。「私の想像する私」はその「規定」を「世界」まで拡張する。そして、「私の自己像や私の目に映る世界のありかたを肯わぬ他者の存在を忘却し、そして、彼／彼女らの世界を圧殺している」と述べている。この議論は、特異な名前表記における倫理的問題も照射する。

恭子が春樹に「敵意」を持っていたのは、春樹が桜良を「傷つけ」ると思っていたからである。タカヒロも「お前みたいな協調性のない暗いだけな奴」「が、桜良に近づくんじゃない!」と述べている。恭子とタカヒロは、春樹とともに桜良から引き離そうとしている。これらは、特異な名前前で表されるような態度で他者と関わる春樹が、恭子と桜良、タカヒロと桜良という関係の「世界を圧殺」するからである。春樹の「ものを盗」んだように、タカヒロ自体にも倫理的問題がある。そのようなタカヒロは、春樹を殴ったことを桜良によって「最低」と言われ排除された。恭子については、春樹は「遺書」を読むまで関わろうとしない。桜良を心配する恭子を知りながら、

春樹は桜良の前で冗談めいてだが「僕らの仲を引き裂く悪魔」と恭子を評する。たびたび、桜良に恭子と「仲良く」してほしいと言われても、春樹はこれを拒絶する。

特異な名前で表されるような態度の春樹でないと、春樹と桜良の交流はなかった。ということは、恭子の「世界を圧殺」し、春樹と桜良の関係でも春樹は桜良の意に反して恭子を拒絶したり「忘却」したりすることと、桜良と関わり続けることはトレードオフなのである、すなわち、特異な名前とそれで表される態度が論理的な誤りを内包し、他者の排除を決定づけられながらも、その特異な名前の問題系の内部によってのみ、桜良と春樹の青春物語は成立するのである³⁰。

とまれ『君の臍臓をたべたい』はまだまだ考える余地がある。ひとまず、特異な名前表記の高い文学性をあらためて確認できたところで、以下を述べて本稿の結論とする。

『君の臍臓をたべたい』は、〈本当の名で呼び合う〉ことを避けて一義的に他者と関わっていた春樹が、〈本当の名で呼び合う〉ことで多義的に他者と関われるようになるまでを、過去と現在で名前表記方法を変えるレトリックで描いた文学作品である³¹。

付記

本稿における小説の『君の臍臓をたべたい』の本文の引用は、注4で示した文庫版による。

また、本稿は2018年8月11日に東京大学駒場キャンパスで開催された、日本科学史学会生物学史分科会主催の生物学史研究会の個人発表「住野よる『君の臍臓をたべたい』論——末期患者との死別をめぐる死生学的問題への文学研究からのアプローチ——」の内容を元にしながらも、これを大幅に修正、改変したものである。当日にコメントーターを務めていただいた白百合女子大学文学部国語国文学科元教授高橋博史氏、司会を務めていただいた明治大学兼任講師奥村大介氏をはじめ、発表に際し貴重な意見を賜った皆様に

深くお礼申し上げます。

さらに、目白大学外国語学部英米語学科専任講師大塩真夕美氏には、英文要旨の校正をしていただいた。心より感謝申し上げます。

注

- ¹ 小原慎司 (2009) 『二十面相の娘——少女探偵団』メディアファクトリー、241頁。
- ² 住野よる (2015) 『君の臍臓をたべたい』双葉社。また、『小説家になろう』上の投稿は既に削除されており、発表時期や単行本化されたものとの差異は判然としない。
- ³ 調査期間は2015年11月27日から2016年11月25日まで。日販調べ。「2016年ベストセラー 最も売れた小説は『キミスイ』」『日系エンタテイメント! (日系電子版)』2016年12月18日、<https://style.nikkei.com/article/DGXMZO11074820W6A221C1000000> (2022年12月30日閲覧)
- ⁴ 住野よる (2017) 『君の臍臓をたべたい』(双葉文庫) 双葉社。
- ⁵ 『月刊アクション』(双葉社)の2016年10月号から2017年7月号まで連載された。単行本情報は以下の通りである。桐原いづみ作画・住野よる原作 (2017) 『君の臍臓をたべたい』上、双葉社。桐原いづみ作画・住野よる原作 (2017) 『君の臍臓をたべたい』下、双葉社。
- ⁶ 月川翔監督『君の臍臓をたべたい』。劇場公開日は2017年7月28日。DVDは東宝から2018年1月17日に発売された。
- ⁷ 「浜辺美波「キミスイ」で初の国際映画祭へ すでに海外から反響〈本人コメント〉」『モデルプレス』2017年9月11日、<https://mdpr.jp/cinema/detail/1713621> (2023年1月3日閲覧)。
- ⁸ 牛嶋新一郎監督『君の臍臓をたべたい』。劇場公開日は2018年9月1日。DVDはアニプレックスから2019年4月3日に発売された。
- ⁹ この「累計」が電子書籍の文庫版も含めているのか、また単行本も含まれているのかなどは、判然としなかった。
- ¹⁰ 行定勲監督 (2004) 『世界の中心で、愛を叫ぶ』東宝、DVD。
- ¹¹ 「キミスイ映画化! 第2のセカチューだ 長澤まさみ後輩・浜辺美波をヒロイン大抜てき」『デイリースポーツ』2016年9月13日、<https://www.daily.co.jp/gossip/2016/09/13/0009483247.shtml> (2023年1月5日閲覧)。ちなみに「セカチュー」は『世界の中心で、愛を叫ぶ』の略である。
- ¹² 「〈原作260万部突破!“キミスイ”現象再び!〉《劇場アニメーション作品》『君

の膀胱をたべたい』新ビジュアル解禁! 豪華追加声優キャスト陣&完成披露試写会開催決定!!』『PR TIMES』2018年6月9日、<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001075.000016356.html> (2023年1月5日閲覧)

- ¹³ 高橋の論考で引用されているのは伊藤左千夫(1951)『野菊の墓』(文庫版)岩波書店である。
- ¹⁴ 片山恭一『世界の中心で、愛を叫ぶ』小学館、2001年。
- ¹⁵ 高橋与四男(2006)「純愛物語論—伊藤左千夫『野菊の墓』を中心に—」『東海大学紀要. 海洋学部』第3巻第3号、77-85頁。
- ¹⁶ 大橋崇行「君の膀胱をたべたい 住野よる著」『福島民放』福島民放社、2015年7月25日。
- ¹⁷ 堀辰雄(1973)『風立ちぬ』野田書房。
- ¹⁸ ここで注意したいのは、あくまで本稿では小説『君の膀胱をたべたい』を恋愛という観点から考察しないというだけで、恋愛という観点からこの作品を読むこともできるということである。たとえば水間千恵(2021)「21世紀の英米ヤングアダルト文学—物語がもつ力と危険性」『10代に手渡す物語—ヤングアダルト文学総論』国立国会図書館国際子ども図書館、7-33頁、file:///C:/Users/USER/Downloads/digidepo_11719711_pn_R2-full.pdf (2022年12月15日閲覧)。この論考では「『君の名は。』と『君の膀胱をたべたい』は両方とも、「死」の影がさす「恋愛」を通じて「自己」を見直し、生きていく若者の姿を描いた作品でした」と書かれている。
- ¹⁹ 土田知則(2020)「第1章 『君の膀胱をたべたい』——僕とは正反対の彼女」『他者の住処 住野よるの小説世界』小鳥遊書房、14-41頁。
- ²⁰ ところで、実際に桜良は春樹をどのように呼んでいたのか。『君の膀胱をたべたい』では、読者に「僕」たる春樹の名前が明らかにされるのは、土田が指摘したように作品の終盤である。しかし、それは作中人物が志賀春樹という氏名を知らないということや、どのように実際は春樹が呼ばれていたかが読者に分からないということの意味してない。たとえば桜良は、旅行に向かう新幹線の中で、春樹の「下の名前」を尋ねる。さらに桜良からの呼びかけられる名は、「【仲良し】くん」や「【?????]くん」と「くん」付けで表記される。以上から桜良は、実際は春樹を「志賀くん」と呼んでいたことが分かる。
- ²¹ この場面以降ではあるが、春樹は桜良のリュックの中の「注射器」や「見たこともない量の錠剤」を見て、「混乱」する。だから、この気付きは結果として幻想ともいえる。ただ、桜良はこの「混乱」している春樹を確認していない。次節で詳しく論じるが、死を重く眼差す関係である【?????]もいささか特殊ではある。しかし、桜良が気付いた春樹で、これが変更されることなく春樹

は眼差され続ける。

- ²² 村岡普一（2020）『名前の哲学』講談社、184頁。
- ²³ 村岡普一（2020）『名前の哲学』講談社、198-199頁。
- ²⁴ 春樹が桜良の名を呼んだことについて「死者はもう応答しないから怖いはずはない」という反論もありうる。死者は生者にとって、永続的かつ物理的に分離された存在である。だから死者は、不変のものであるというのも一つの考えである。しかし、死者は死後も生者と「絆」を結び続け、ともに成長、変容して生きていくこともある。この研究が近年、特に日本で増えてきている。春樹は、この死者である桜良を不変で対話不可能な存在としては捉えていない。桜良と「絆」を結び続けともに生きている。これは春樹が墓参りのときに、恭子とともに桜良の笑い声を聞いたり、桜良の墓に話しかけていたりすることから明らかである。本稿は死生学研究の論文ではないため、これ以上の詳しい説明や検討はしないが、この死者との「絆」の研究について、死者との多様な関係を記述、分析し、支持する論文の一つ挙げておく。鷹田佳典（2006）「故人との絆はいかにして継続されるのか」『年報社会学論集』19号、177-188頁。
- ²⁵ 墓参りの場面は過去ではなく現在であるから、映画版やアニメ版のように特異な名前を表現できないことに伴い一義的な関係を描けないだけ、という反論も考えられる。ただ、これについては本節の考察から、応答できる。特異な名前表記で描かれる関係は、他者と名を呼び合わないというものであった。春樹は人と名を呼び合う関係を構築できており、特異な名前表記で表されるような名を呼び合うことを忌避するような一義的な関係をもう他者と築かないのである。
- ²⁶ 住野よる（2018）『父と追憶の誰かに』アニプレックス。これは、アニメ映画版『君の膵臓をたべたい』が上映された際の、映画館への来場者特典として配布された非売品の短編である。また、Sony Music Labels Inc から2018年に発売された sumika『ファンファーレ／春夏秋冬』の初回限定版CDの購入特典としても、『君の膵臓をたべたい』の前日単である住野よる（2018）『日々の透き通るもたれ合い』が付された。
- ²⁷ 注24の内容と関連するが、死者とのかかわりは多様に論じられている。さらに本文で挙げた以外の、『君の膵臓をたべたい』で描かれる死をめぐる倫理的問題の例の一つだけ挙げておく。たとえば春樹は、親密な関係であった桜良と死別しながらも、回想している限りは悲嘆してしない。親密であればあるほど、その人を亡くしたのならば深く悲嘆すべき、良い葬儀をするべきという規範への抗いとも捉えられる。とまれ、春樹の桜良の死との向き合い方の倫理性については、本文でも述べたとおりこれ以上の研究は行わない。ただ、死との関わり方やその研究を批判的に行う「批判的死生学」の教科書として、以下を挙げて

おく。トニー・ウォルター（2020）『いま 死の意味とは』堀江宗正訳、岩波書店。

- ²⁸ 山崎泰孝（2019）「第四章 リルケ作品における名づけと呼びかけ」『固有名名の詩学』前田佳一編、法政大学出版局、80-95 頁。
- ²⁹ 岡真理（2000）「終章 「他者」の存在を思い出すこと」『彼女の「正しい」名前とは何か——第三世界フェミニズムの思想』青土社、275-304 頁。
- ³⁰ 康潤伊（2017）「柳美里『8月の果て』における非 - 「本名」——創氏改名の陰としての号と源氏名——」『昭和文学研究』第74集、157-171 頁。柳美里（2004）『8月の果て』新潮社では、創氏改名の問題が描かれている。康は、『8月の果て』を『彼女の「正しい」名前とは何か』も参照しながら名前という視座で考察し、作品が「本名」が「善」で「創氏改名」や「源氏名」は「悪」という分かりやすい対立を描いているのではなく、この「名前をめぐる問題系」を批評していることを明らかにしている。この康の論考の要約引用に明らかなように、本節の議論はこの論考に強く影響を受けているが、本文中では引用がないために、ここに情報を挙げておいた。
- ³¹ 藤川直也（2014）『名前に何の意味があるのか——固有名名の哲学』勁草書房。この本もまた、本文中で引用をしていないが、本稿の執筆にあたり大いに参考になったのでここで挙げておく。「第3章 固有名と言語的規約」（69-86 頁）の前半部では、固有名の多義性や文脈と固有名の指示との関係を論じられている。特にここが、『君の隣臓をたべたい』における名前とその機能を、整理したり考えたりする際に役立った。

The Poetics of Names about the Incomprehensible Other:
A Study of *Kimi no Suizō wo Tabetai* by SUMINO Yoru

NISHIGAI Satoshi

ABSTRACT

Pure love story genre, which has frequently enjoyed a boom in popularity, is formally characterized by the depiction of a passionate love affair within a limited period of time between a woman who is about to die from an incurable disease and a healthy man. SUMINO Yoru's *Kimi no Suizō wo Tabetai* has also been consumed by the masses as a pure love story. However, as previous studies have pointed out, while *Kimi no Suizō wo Tabetai* is based on a pure love story format, it does not emphasize romance. In fact, *Kimi no Suizō wo Tabetai* depicts a man and a woman who avoid romantic relationships. Their relationship is represented as some peculiar names such as 【仲良し】 and 【?????】. Nevertheless, these names have not been examined in detail in previous studies analyzing their relationship. In this paper, I studied *Kimi no Suizō wo Tabetai* from the perspective of the functions and meanings of these peculiar names.